

令和五年

七十二候 カレンダー

立春、夏至、秋分、大寒など半月ごとの季節の変化を表す「二十四節気」と、それをさらに三つに分けて、気象の動きや動植物の成長を繊細な言葉で表現した「七十二候」は、あつちのこをとりまわす「東風解凍」、「草露白」など日本の細やかな季節の移り変わりを感ぜられる農事暦として、古くから日本人に親しまれてきた。美しい絵を添えてその言葉をつづる『七十二候新撰』カレンダーの企画・制作を行う「泰山堂」の熊谷泰さんに話を聞いた。



カレンダーが誕生したのは二〇一九年。それまでも日本の四季や伝統に心を寄せ、生き物たちへの温かな眼差しをテーマとするカレンダーを制作してきた熊谷さんは、国会図書館で江戸時代に描かれた植物画に出会い、一目惚れをした。それは本草学者・佐藤成裕

が水戸藩主・徳川斉昭の命によって描いた『七十二候新撰』を、明治時代の植物学者・白井光太郎が伝写したものであった。

江戸と明治、二人の植物学者による 繊細な植物画が令和のカレンダーに



横 86mm × 縦 210mm。価格は 1,100 円。広げるとひと月が一覧できる。各冊の裏表紙には、佐藤成裕と白井光太郎、二十四節気と七十二候、七十二候新撰で描かれている題材についてのコラムを掲載



洋室にもなじむシンプルなデザイン

※江戸時代の代表的な暦の一つで、御師（参拝者のために祈禱、参拝の案内、宿泊などの世話をする神職）が伊勢詣りの土産として御札に添えて配った

家・熊谷守一とのことで、絵心と自然を愛する心は、たしかに受け継がれているようだ。

カレンダーは縦長の折本形式で、二カ月で一冊、計六冊セット。折本形式は「伊勢暦」(※)を参考にしたという。制作して四年目となる今回は、デザインを変更して絵の位置を七十二候ごとに互い違いになるように配置した。「手帳のように持ち歩いたり、ミニ屏風のように机に置いたりするのにもおすすめです。季節ごとに替えることで、四季の移り変わりをより身近に感じることができるでしょう」と熊谷さんは話す。



熊谷さんが所蔵する伊勢暦（文政9年）と『日本博物学年表』